九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

越境するポップカルチャーと「東アジア人」アイデンティティ : 九州大学での日中韓シンポジウムと中韓でのフィールドワークを通して考える

大野, 俊
九州大学アジア総合政策センター教授

https://doi.org/10.15017/13326

出版情報：九州大学アジア総合政策センター紀要. 2, pp.93-101, 2007-09-28. Kyushu University Asia Center
バージョン：
権利関係：

(研究ノート３)

越境するポップカルチャーと「東アジア人」アイデンティティ
── 九州大学での日中韓シンポジウムと中韓でのフィールドワークを通して考える ──

Transnational Popculture and the Formation of 'East Asian' Identity:
Reflections on the Basis of the Discussions at China, Korea and Japan Joint Symposium Sponsored by Kyushu University Asia Center and My Fieldwork in Beijing and Seoul

大野 俊
(九州大学アジア総合政策センター教授)
OHNO, Shun
(Professor, Asia Center, Kyushu University)

Abstract

One of the main themes in Japan-China-South Korea joint symposium held at Kyushu University in Fukuoka in February 2007 was the possibility of formation of regional identities in East Asia. This paper discusses about correlations between transnational flows of popculture and identities in this region based on various discussions at the symposium and my fieldwork in Beijing and Seoul. In short, popculture has the capabilities in changing mutual perceptions among East Asian citizens, but bilateral relations among those countries influence on their receptivity of foreign cultures. It will be a long and arduous way to formation of 'East Asian' identity among the masses in this region.

要 約

九州大学アジア総合政策センターは2007年２月１日と２日、中国社会科学院、韓国・東国大学校との共催で多分野にまたがる「日中韓シンポジウム」を福岡市で開催した。ここでの主要テーマの一つが、東アジアにおける地域アイデンティティ形成の可能性だった。小論は、このシンポで私がコーディネーターを務めた「ポップカルチャーと基底文化」分科会での報告、その後の北京とソウルでのフィールドワークを踏まえ、ポップカルチャーと地域アイデンティティの関連を議論する。結論的に言えば、越境するポップカルチャーは東アジア市民の相互認識に変化をもたらす力はあるが、相手国の文化の受容にはその時々の国家間関係が影響し、大衆レベルでの「東アジア人」アイデンティティ共有までの道のりは平坦ではない。

はじめに：アイデンティティのいま

「アイデンティティ」という言葉は、この20年余り、世界中のアカデミズム、とりわけ社会科学の分野で、最も喚起力を有する言葉として頻繁に使われてきた。ナショナル・アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、地域アイデンティティ、アイデンティティ・ポリティックスなどの言葉が余り厳密に定義されることもなく、各国の学会、メディア界、さらには、政界、財界や一般市民の議論や会話でも使われるようになってきた。

「アイデンティティ」という言葉はもともと、ドイツ生まれのアメリカ人学者、エリック・エリクソンが1960年代に精神分析の概念として使い始めた。彼の代表作、*Identity: Youth and Crisis* (Erikson, 1968) 出版以降、この言葉はいちやく各国に広がった。日本語の国語辞典では「自我同一性」や「自己同一性」という難解な訳語があてられているが、現在は「帰属意識」という意味で使われるケースが一般的である。

いま、なぜアイデンティティが問題なのかと

いうと、人々の帰属意識が以前よりも複雑、かつ多様になってきて、単一のアイデンティティが揺らぎ始めた世界の現実がある。東西冷戦終結後、世界各地で民族、宗教、共有する歴史などに基づくアイデンティティの主張が激しくなり、旧ソビエト連邦の周縁地域、バルカン半島などで分離独立が相次いだ。アジアだと、インドネシアから分離した東ティモールの独立(2002年）が記憶に新しい。

グローバリゼーションの進展もまた、世界中の人々のアイデンティティに影響を及ぼしている。大企業の多国籍化や、金融の世界に象徴される巨大資本の越境移動が激化し、さらには、移民や国際結婚や混血者の激増など、多様なひとのグローバリゼーションが進展している（大野、2003参照)。それに伴って、国家や民族集団の帰属先が単一ではない、複数で複合的なアイデンティティの持ち主が世界中で増え、居住地域（領土）と自分のアイデンティティがかけ離れる「アイデンティティの脱領土化」(deterritorialization of identities）という現象も目立ってきた。

経済、貿易、安全保障などのブロック化が進行して、地域アイデンティティも生まれつつある。九州大のシンポでウルフガング・パーペ・日欧産業協力センター事務局長が報告したように、欧州では自分の国に帰属する「ナショナル・アイデンティティ」とともに、「ヨーロッパ人」という地域帰属のアイデンティティが育ちつつある。[1]

小論の本題である東アジアのアイデンティティだが、「ヨーロッパ人」と同じような意味で「東アジア人」というアイデンティティの共有化が進んでいるとは言い難い。「東アジア」には、日中韓などアジア北東部を指す「狭義の東アジア」と、北東部に東南アジア諸国などを加えた「広義の東アジア」がある。2006年から始まった「東アジア・サミット」には、日中韓、東南アジア全10カ国にオーストラリア、ニュージーランド、インドも加わる。白人が中心のオーストラリアやニュージーランドは「アジア」の範疇には入れ難く[2]、「南アジア」のインドも加えて「東アジア・サミット」と呼称するのは疑問である。

「東アジア」という地理概念は1980年代後半になってよく議論されるようになったもので、その境界はいまだあいまいである。だいたい、「アジア」という地理概念でさえ、アカデミズムの世界で確立されていない。トルコは欧州連合（EU）加盟を目指しているが、中東の一員として「アジア」に含まれるべきとの議論もある。「東アジア人」といっても、モンゴル人ら中央アジアに位置する人々まで含まれるかどうかは議論が分かれる。

「東アジア文化」の同質性や美学が地域アイデンティティを育むか？

九州大の日中韓シンポでは、東アジアに地域アイデンティティが生まれる可能性が議論の一つの焦点となった。そして、「ポップカルチャーと基底文化」分科会では、ポップカルチャー越境現象の「東アジア人」アイデンティティ形成へのインパクトなどを議論した。その重要素材になったのが、日本、中国、台湾、東南アジア諸国などにおける、ここ数年の「韓流」現象である。

『冬のソナタ』、『チャングムの誓い』など韓国発のテレビ番組や映画は、各国で大ヒットしたが、それが欧米、南アジアなどの諸国でヒットしたという話は聞かない。『冬のソナタ』がNHK 地上波での放送によって日本全国でブレイクした2004年、私はオーストラリアの首都キャンベラで留学生活を送っていた。現地で、この番組を知っていたのは、韓国、日本、中国など、それこそ東アジアからの移民や留学生だった。ベッドシーンは皆無、キスシーンもほとんどない愛情表現奥ゆかしい「儒教的ラブストーリー」は、白人のオーストラリア人から見れば、まどろっこしくて見ていられないようだった。

2005年の後半、今度はフィリピン大学客員教

1 1999年の欧州委員会ユーロ・バロメーター調査によると、「ヨーロッパ人」という意識を持つ市民の割合は、ルクセンブルク、イタリア、スペインなどでは６割を超えた。しかし、英国ではこの回答が３割に満たないなど、国によってかなりばらつきがあった（European Commission Press and Communication Service, 2000, *How Europeans see themselves: Looking thorough the mirror with public opinion surveys*（http://europa.eu.int/comm/publications/booklets/eu_documentation/05/txt_en.pdf)。

2 オーストラリアは、キーティング政権（労働党）時代、エバンス外相が自国を「アジアではないかもしれないが、東アジア半球の一部である」と、ASEAN（東南アジア諸国連合）拡大外相会議の席で表現したことがある（『毎日新聞』夕刊、1995年８月３日)。

員としてマニラに滞在した。そこでは、『*My Sassy Girl*（猟奇的な彼女)』などの韓国映画が若者の間で人気を博し、『*Jewel in the Palace*（チャングムの誓い)』をはじめとする韓国の連続テレビドラマ（フィリピンでは「Koreanovela」と呼称）も地上波チャンネルで連日のように放映されていた。

「ASEAN（東南アジア諸国連合）＋３（日中韓)」という一般的な地理概念の「東アジア」の境界とほぼ重なる「韓流」現象をどう理解すべきか。日中韓シンポで、３カ国の漢字文化に通じる李相哲（りそうてつ）・龍谷大学社会学部教授は『チャングムの誓い』を例として取り上げ、新しい「東アジア文化」の可能性を論じた。儒教を統治理念にしていた朝鮮王朝の時代、名もなき女性が宮中の最高料理人で王の主治医にもなる実在人物のサクセス・ストーリー。それは、聖なる者でも世俗的でもない、その間にある生き様を理想とするところが儒教的価値観に合った「古き良き東アジア」であり、東アジア地域の人々がそれに共感を覚えた、と李教授は指摘した（李、2007)。

また、東国大学校日本研究所長の洪潤植（ホンヨンシク）教授は、東アジアに広がった「韓流」について、「東アジア人が長い間にわたって共有してきた文化的同質性の回復を意味するのではないか」(洪、2007）とチャレンジングな発言をした。同研究所の金秀炫（キムスヒュン）研究員は分科会で「東アジアの伝統的美学によって支えられたうえで現代的に受容されてきた」(金、2007）と、東アジアに通じる伝統美学の存在を指摘した。

ここで提起された命題は、東アジアの基底文化がこの地域に広がる「韓流」や「日流」と関連性があるのかどうかである。シンポでは、東アジアの基底文化として、漢字、仏教、儒教、道教などが挙げられた。しかし、「韓流」は、儒教の影響が華人社会を除けばほとんど及ばないフィリピン、ビルマなどの東南アジア諸国にも広がっている。また、韓国は、漢字がマスメディアや学校現場からほとんど姿を消してハングル全盛時代を迎えている。こうした現状に目をやると、儒教文化や漢字文化では東アジアの大衆文化越境を説明できない部分が残る。

シンポの分科会では、中国における「日流」や「韓流」についての報告もあった。中国国際放送局ディレクターとして、日中の音楽をそれぞれ相手国に紹介する活動をしてきた太和田基氏は、中国で近年、J-Pop よりも K-Pop の人気が高い点に焦点を当てて報告した。その理由について、北京で J-Pop ファン100人対象にアンケート調査をしたが、４割近くが「日本には歴史認識の問題があるから」と回答したという(太和田、2007)。

こうした分科会でのやりとりは、朝日新聞夕刊文化面（西部本社版は2007年２月９日、東京本社版は同月10日）に大きく取り上げられた。「日中韓のポップカルチャー」「共有が生む？『東アジア人』」(東京本社版）という見出しの記事のインパクトは大きかった。いま「Yahoo! 辞書」で「東アジア人」という言葉を引くと、九州大のシンポが紹介され、ここでの造語のような印象を受ける。[3]

日本では『日本人が東アジア人になる日』というタイトルの本が1995年に出版され、中国では人民日報が2005年に東アジア共同体をめぐる評論で「東アジア人」という言葉を用いている(『人民網日文版』、2005年11月15日)。東京では2006年11月に日中韓の研究者、ジャーナリストらが集まる東アジア平和フォーラム「私たちは東アジア人になれるか」が開かれている。それでも「東アジア人」という言葉が市民の会話で用いられることはまずない。

九州大シンポでは、福岡市民中心の聴衆者の意識を探るため、「自分が東アジア人と意識したことはあるか」との設問のアンケートを実施した。われわれ主催者も取材のマスメディア関係者も一様に驚いたのは、回答者の76%が「ある」と答えたことだ。サンプルが百人未満で少ないとはいえ、大陸に最も近い福岡の市民の「東アジア人」意識が、東京、大阪など他府県民より格段に高いのは間違いないだろう。全国紙が、通常は「地味」だとしてまともに扱わない大学のシンポを大きく取り上げたのも、福岡拠点の記者がシンポの議論に共感を覚えた証だろう。

3「Yahoo! 辞書」の「東アジア人」では、「日本、韓国、中国の若者の間で、漫画やロック音楽などが共有され、ポップカルチャー（大衆文化）が３か国の間を行き来して、意識のうえで国境がなくっていることを『東アジア』という１つの概念で考えようというもの」と説明されている。

歴史問題が影落とす中国の「日流」受容

ポップカルチャーのほか、産業連携、生命倫理と臓器移植、高齢化社会対応の各分科会を開き、複数分野で日中韓の連携策を議論した九州大のシンポは、共催者の中国社会科学院、東国大学校からその意義を高く評価された。結果として、2007年11月にソウルで、2008年には中国で３カ国シンポを継続開催することになった。その縁で、2007年３月中旬、北京を訪問し、中国社会科学院の研究者たちと意見を交換した。

この北京滞在期間中の３月13日、「日中文化・スポーツ交流年」を記念する「日中スーパーライブ in 北京」を見物した。日本からは、ラップ・ユニットの w-inds. はじめ、後藤真希、平原綾香、中孝介が出演。中国からは、全土から15万人も応募する湖南衛星テレビのスター誕生番組『超級女声』入賞の紀敏佳（ジ・ミンジア）、中島美嘉の『雪の華』の中国語カバーソング『飄雪』などのヒット曲を持つ韓雪（ハンスエ）が出て、日中のスターが入り混じって美しいハーモニーをかなでた。

二千人余の若者で埋められた会場は、最後に w-inds. が壇上に現れると、「キャー」という若い女性たちのかしましい熱狂に包まれ、客席は総立ちになった。ファンの女性たちは、黒タイツに黒ブーツ、ぴっちりしたジーンズなど、しゃれた衣装が目立つ。茶髪はおろか、金髪にした女性もいた。手には携帯電話やデジタルカメラが握られ、外見上は日本の若者と見分けがつかない。エンタテイメントやファッションの世界では、日中間の国境の壁が限りなく低くなりつつあることを肌身に感じた。

この催しに合わせて、日本の音楽産業界でつくる音楽産業・文化振興財団の資金で北京にできた「日本音楽情報センター」がリニューアルオープンし、その開所式が行われた。ここには、J-Pop 歌手多数の CD が無料で聴けるブースが設けられている。開所式当日、センターに w-inds. が現れるとの情報がつかんだ20歳前後の女性ファンでごった返していたが、果たして w-inds. の３青年が車で到着した。会場は華やいだ歓声に包まれ、中には感激で泣き出す女性もいた。

日中スーパーライブで強調しておきたい点が２つある。一つは、主催が在中国日本大使館と中国対外文化集団公司で、聴衆は無料で入場できたこと。日本大使館は催しのレセプションを開き、「あなたたちは外交官何人分もの仕事をした」と出演者の労をねぎらったという。中華圏でも売れっ子の J-Pop のスターたちは、日本の対中文化外交の一翼を担ったのである。

北京の日本音楽情報センターで、日本のラップ・ユニット、w-inds. と対面する中国人女性ファン。中には、感激して泣き出す若者もいた。同センターでは J-Pop の CD が無料で聴ける（2007年３月13日、大野俊写す）。

もう１点は、聴衆の大半はインターネット情報などを通してこの催しを知った中産階級かそれ以上の階層に属する若者たちだということ。携帯やデジタルカメラを所持し、高級ファッションを身にまとう若者は中国内陸部には余りいない。フジテレビの連続ドラマ『101回目のプロポーズ』がリメイクされて上海を舞台にした『第百一次求婚』（2004年放映）という中国版トレンディ・ドラマになったが、そこに登場する上海の若者たちの生活空間には高級マイカーや豪華なマンションなど、アジア都市部のニュー・リッチ層で標準化するモダニティが表現されていたことを思い出した。

中国のテレビドラマの世界では、『東京ラブストーリー』をはじめとする1990年代の「日劇」（日本ドラマ）ブームは去り、日本よりも数年早く到来した「韓流」のドラマが依然、人気を博している。私が北京に滞在中、地上波テレビで放映されていた地元のドラマは、難病で死期が間近の男性と聾唖の女性の恋物語で、韓国ドラマと見まがうものだった。

中国では「韓流」は「日流」と近似したものとして受容されているようだ。北京の繁華街、西単の大型書店では、映画・テレビ番組の

DVD や VCD も、ポップ音楽の CD も「日韓」コーナーとして並べられていた。この店では日韓の作品の分量はそう大差がなかった。

ただ、外国モノのコーナーに、『*007*』や『*Mr. Bean*』といった世界的人気作と並んで、日本映画『君よ憤怒の河を渉れ』の DVD が多数、並んでいたのが目を引いた。高倉健主演のこの映画は日本上映２年後の1978年に中国で公開された。殺人などの嫌疑をかけられた検事が真犯人を追いつめていく筋書きの作品は、中国国民の８割が観賞するほどの人気を集め、著名な中国人映画監督、張芸謀（チャンイーモウ）氏によると、「(高倉健は) いわば文革直後の中国における国民的スターだった。高倉健の人気は、おそらく最近の日本での“ヨン様”ブームの何十倍にものぼる凄まじいものだった」(劉、2006：12) という。

この当時の日中関係は良好で、両国の間に歴史教科書の書き換え問題も靖国神社参拝問題もなかった。近年は、中国でこれほどブレイクした日本の映画もテレビ番組も皆無である。そして、昨今は、太和田氏がシンポで報告したように、韓国のテレビ番組や K-Pop の方が日本のものよりもはるかに北京で人気を博しているのが現状である。

その中で、日本のポップカルチャーを愛でる市民の意識はどうなのか。日本音楽情報センターに寄った w-inds. のファン、宋さん（25歳）がインタビューに応じてくれた。彼女は大卒で政府機関の事務職員。小学生のときから日本製の文房具が好みで、日本に興味を抱いた。高校３年生の時に北京のフリーマーケットで売られる日本人歌手の CD を買い始めた。ラジオで聴いたことのある浜崎あゆみ、宇多田ひかるらの作品で、そのうち w-inds. に行き着いた。

「J-Pop 全体が好き。歌手の顔もスタイルもアジア系で、中国人と差がないし、音楽は中国のよりも質がいい」と魅了された理由を語る。一方で、「同世代で J-Pop ファンはごく少数。C-Pop（中国ポップ）やアメリカン・ポップのファンが中心」という。中国の若者の間にもうひとつ J-Pop が広がらない理由は、「日本という国の問題で、政治的問題があるから。(日中) 戦争の問題で日本政府は認めていない」というのが彼女の見方である。

日本の首相の靖国神社参拝がひっかかっているのかと思って訊ねると、「私が知っている限りでは、靖国神社は国の英雄を祀る所。１国の指導者が参るのが問題だから、家族に参拝を頼んだらいい」と提案した。また、歴史教科書の書き換え問題については「中国の放送局が流しているのが事実なら、そんな改竄は許さない」と、きっぱり言った。

J-Pop ファンとして知られる彼女は、周りの人から「日本は２級国なのに、J-Pop が好きなのか」とよく言われ、「私は音楽だけど、あなたは日本のゲームが好きなんでしょう」と言い返すという。日本のポップスには魅了されるが、国家指導者の戦争がらみの無神経な言動ははがゆい。そんな思いが伝わってきた。

宋さんのような見方は、北京の日本事情通の間でも多い。九州大の日中韓シンポで発表した中国社会科学院日本研究所の若手研究者、金瑩（ジンイン）講師は「歴史認識問題の解決は、『日流』のさらなる受容のための一つの条件。ポップカルチャーの力だけで相互信頼は築けない」という意見である。

この北京での見聞後、中国のテレビ事情にやや変化が起きた。４月の温家宝首相訪日など日中関係改善の流れを受けて、天津のテレビ局がその月末から、1980年代に中国で大ヒットした『赤い疑惑』(山口百恵主演) を再放送し、上海のテレビ局も、米倉涼子主演の『女系家族』や『黒革の手帳』を放映した (『読売新聞』、2005年５月９日)。一方で、中国政府は2006年９月以降、自国のアニメ産業保護の観点から、日本産が圧倒的存在の海外アニメ番組のゴールデンタイム放映を禁止している (NIKKEI NET, 2006年８月13日)。

共産党政権の中国では、外国産の大衆文化の流入度は依然、政府の方針に左右される状態にある。今後の「日流」受容で重要なポイントは、中国政府の外国文化管理政策のあり方であり、日中の国家間関係の行方である。

エスカレートする韓国の「日流」受容

2007年９月初旬、今度はソウルを訪問する機会を得た。韓国・中央日報など主催の「J-Global Forum 2007」という北東アジア共同体をめぐる国際シンポジウム参加や、東国大学校との第２回日中韓シンポの打ち合わせが目

的だった。この機会にソウルの若者文化の現場を見て歩いた。

九州大のシンポでは、東アジアにおける「韓流」の地域拡散が議論の一つの焦点になった。しかし、ソウルで驚くのは、韓国における「日流」の広がりである。日本の大衆文化は、日韓関係が改善した金大中政権時代の1998年以来、４次にわたって開放された。日本のテレビドラマの吹き替えやバラエティ番組などの放送はまだ認められていないものの、それ以外はほとんど開放された。それに伴って、『華麗なる一族』、『花より男子２』などが好評を博し、「イルド」（イルボン・ドラマ＝日本ドラマ＝の略称）旋風が起きた。ソウルの繁華街、光化門にある大型書店をのぞくと、上記ドラマで主演した木村拓哉、松本潤らのアイドル写真集が多数売られていた。

この本屋には、CD ショップもあり、そこには北京の書店で見かけたのよりもぐっと充実した J-Pop コーナーが設けられていた。演歌など歌謡曲の「大人のための J-Pop」や、過日、ボーカルの坂井泉水が亡くなった ZARD の作品コーナーもあった。店員の話だと、売り上げトップは、2006年11月にソウルで3000人コンサートを成功させた５人組の嵐。[4] 中島美嘉、浜崎あゆみら華人圏でもおなじみの J-Pop 歌手の CD 作品も多いが、最近は Gackt はじめ男性歌手の台頭が目立つ。J-Pop 歌手の名前のラベルにはカタカナ文字まで記されていた。

ソウル・光化門の大型書店内で若者の買い物客の姿が絶えない J-Pop の CD コーナー。撮影日（2007年９月12日）は、ボーカルが亡くなった ZARD の CD が山積みにされていた（大野俊写す）。

日本のアニメやマンガは、公式的な大衆文化開放以前から、国籍を明示しない形で韓国に入り、韓国の若者たちの間で人気だった。マンガ文化はすっかり定着し、ワインが題材の『神の雫』は、売れ行きが本元の日本で100万部余りなのに、韓国ではその翻訳本が130万部余りも売られたという（鄭、2007）。

小説の分野もここ数年、「日流」の大波に襲われている。韓国の小説市場は2006年、日本の作品シェアが31％と韓国の作品シェア（23％）を上回った（鄭、2007）。前述の書店の店員の話では、売れ筋の作家は村上春樹、宮部みゆき、江國香織、奥田秀郎で、高校生から20代半ばの女性が読者の中心という。

ソウルの盛り場、明洞は若者が集うファッショナブルな街だが、ここには５つの小劇場から成るシネマ・コンプレックス「シネカノン」（在日韓国人の李鳳宇（イボンウ）が代表の映画会社）があって、始終、日本映画を中心に上映している。店員の話によると、最も人気の日本人俳優はオダギリジョーで、彼の主演映画のチケットは即座に売り切れる。私が訪問時はマンガが原作の花魁物語『さくらん』が上映され、故・今村昌平監督の作品も週１回のペースで上映されていた。

８年ぶりに明洞を歩いて驚いたのは、日本文化の氾濫である。寿司店など日本食のレストランが増え、街頭には J-Pop が日本語のまま流れている。店先の看板には、販売メニューがカタカナやひらがなで記されている。日本人旅行客の人気観光スポットという事情はあるにせよ、「倭色文化」が目の敵にされた時代には想像もできない光景である。最近の人気スポット、弘益大学近くの東橋洞界隈も歩いたが、そこには赤提灯をぶら下げた日本の「居酒屋」があちこちで営業し、「讃岐うどん」など日本語表示の屋台も目立った。

日本における「韓流」はかつての勢いはなく、韓国映画の対日輸出は2006年、その前年の17％の1000万ﾄﾞﾙ余りに激減した（『西日本新聞』夕刊、2007年１月23日）。それと逆行する形での韓国の「日流」旋風は、文化の流れとしてはアンバランスである。しかし、韓国言論界で、か

4　2006年11月12日の韓国・聯合ニュースによると、前日の嵐のコンサートで、総立ちのファンは１曲目の『*Arashi*』から４曲目の『*Lucky Man*』まで正確な日本語で合唱したという。

つてのような「日本の文化侵略」批判が高まっているわけではない。社団法人「韓日未来フォーラム」代表で、東亜ドットコム社長の鄭求宗（チュンクチョン）氏は「韓日間で年間500万人近い旅行客の往来があり、インターネットも発達した時代に壁を設けても通用しない。韓国も日本もグローバル・スタンダードで文化コンテンツを作っていくしかない」と、私に語った。日本滞在歴通算８年の知日派である鄭代表は、歴史認識の問題については「日韓の歴史家の共同研究が進んでいる」と語り、大衆文化とは切り離す見方を示した。

こうした韓国言論人の意見は、東アジアを席巻した自国の文化コンテンツへの自信の表れだろうし、九州大のシンポで張竜傑（チャンヨンゴル）・慶南大学校副教授（張、2007）が報告したように「韓国人にとって、日本のポップカルチャーは自分を積極的に変えていく一種の触媒剤」という認識の広がりの結果とも受け取れる。

現に、韓国の映画やテレビでは最近、日本のマンガや小説を原作にしたり、日本のドラマをリメイクして大ヒットさせる事例が相次いでいる。[5] 近似性の高い日韓の混淆プロダクツは他のアジア諸国を主要マーケットとする強力な輸出商品にもなりうる。鄭代表の言う「韓日文化の戦略的提携」、あるいは日韓作品のハイブリッド化の成否は今後、双方にとって「win-winゲーム」になるか否かにかかっているだろう。

若者の文化と流動的アイデンティティ

ポップカルチャーの越境と共有化が東アジアの地域アイデンティティ形成上、果たす役割については、識者の間に様々な見方がある。この問題が焦点になった2002年の都内での第８回アジア太平洋ジャーナリスト会議（フォーリン・プレスセンター主催）では、以下のような議論がかわされたという（石塚、2003：246–47）。

中国・蘇海河（スハイフ）『中国青年報』東京支局長「ポップカルチャーの流行によって、自分あるいは自国のアイデンティティが失われるとか、弱体化するということはありえない」

韓国・南潤昊（ナムユンホ）『中央日報』東京特派員「ポップカルチャーが国と国との関係のセメントや接着剤にはならなくても、クッションの役割は果たせるだろう」

タイ・ジーラワット・ナタラン『ネーション』文化担当副部長「政治的な統合は考えられなくても、ポップカルチャーが何かに向けての推進力にはなりうるのではないか」

アジアのメディア文化に身を置くジャーナリストの間では、ポップカルチャーの地域アイデンティティ形成への役割を限定的ながらも認める意見が少なくないようだ。この議論でもっと強調すべきは、ポップカルチャーの最大の消費者で実践者でもある青少年の間で特にアイデンティティの可変性や流動性が高い点である。外国の文物に心を奪われて育った人々は、世宗大学日本文学科教授の朴裕河（パクユハ）（2005：218）の言葉を借りると、「生まれつきアイデンティティが壊れた状態にある」可能性さえあるのだから。

J-Pop やテレビドラマ、コスプレなど日本のポップカルチャーの受容度が東南アジアの中で最も高いシンガポールでは、華人系の若者の８%が「できれば日本人でありかたかった」と答えた調査結果が地元紙に載ったことがある（*Strait Times*, 19 December 1999; 岩渕、2001：312）。こうした「他国民になりたい願望」は、経済発展速度が遅い他のアジア諸国の若者の間ではさらに強い。フィリピン大学教員の調査では、マニラの小学生の多くが、もし生まれ変われるのであれば、アメリカ人や日本人になりたい、と答えたという（David, 2002: 78）。

こうした愛国心の衰弱は、アジア途上国の青少年に限った話ではない。日本の全国紙の世論調査では「日本に生まれて良かった」と思う者が圧倒的に多いものの、「仮に外国の軍隊が攻めてきたらどうするか」という問いに、回答者の32%が「逃げる」、22%が「降参する」とそれぞれ答え、それも若年層ほどこうした回答率が高かった（朝日新聞取材班、2007、319–26）。また、韓国では、青少年の７割が移民を希望しているというアンケート結果が出ているという（朴、2005：221）。こうした調査結果が示すの

5 例えば、日本のマンガ『カンナさん大成功です！』を映画化した『美女はつらいよ』は2006年公開以来、全国で660万人動員の大ヒット。テレビドラマでは、日本の『白い巨塔』のリメイク版（2007年放映）が最高視聴率25%を記録した（『朝日新聞』朝刊、2007年３月31日、同年４月25日）。

は、生まれたころから日常的に外国文化に接している若者たちの「心の国境」が溶解している兆しだろう。

ナショナルなものにせよ、エスニックなものにせよ、アイデンティティは所与のものとして人々の心に存在するものではない。出版、印刷などコミュニケーション技術の進展が、各国で国民意識、つまり国民的アイデンティティの形成に大きな影響を与えたことは、ベネディクト・アンダーソン（1987）が指摘の通りだろう。しかし、コミュニケーション技術の発達が国民意識の強化につながる時代はすでに終焉を遂げつつある。衛星放送、インターネットなどで瞬時に国境を越える音楽、映像など様々な表現は、市民の意識を「ナショナル」の枠からはみ出す方向に作用も果たす。比較優位の外国大衆文化に日常的にどっぷりつかっている若者たちはなかんずくこの傾向が強いだろう。

おわりに

ハリウッド映画にはまった日本人がアメリカに憧れることはあるが、それだけでアメリカ人意識を持つことはない。同様に、日本のアニメやマンガの虜になった韓国人やフィリピン人が、日本人意識を抱くこともないだろう。ただ、アジア地域に住む近隣の異邦人の容貌、身体、愛情表現などの類似性や近似性をポップカルチャーの消費を通して発見し、「同じアジア人」（あるいは「東アジア人」）という地域アイデンティティを抱き始めるきっかけにはなりうる。そこから、その国の言語、文化、歴史などを学ぶ志向が生まれさえする。『冬のソナタ』の日本人ファンの一部は、そうした能動的行為に踏み出した（毛利、2004）。

問題は、東アジアにおけるポップカルチャーの流れが、映画、テレビドラマなど広範な分野でつながりができてきた日韓などを除けば、双方向になっていないことだ。日本との間で歴史認識問題を抱える中国では、この問題が「日流」受容の妨げになっているし、東アジアの人口大国であるインドネシア、フィリピン、ベトナムなどの文化コンテンツは日中韓にほとんど流入していない。双方向性も均衡性も欠く文化の奔流は、政治・経済問題など国家間摩擦が発生したとき、容易に「文化侵略」批判を引き起こす危険性をはらむ。

私たちは、東アジアで越境し、リンクする大衆文化に目を奪われがちだ。しかし、この地域でいまだつながっていない文化にも目を凝らすべきだろう。「東アジア人」アイデンティティが広域に醸成されるためには、共感できる目標や共有する価値観の特定が必要だからだ。その見極めができないと、互いの国の異質性がいつまでたっても理解できず、同質であるはずとの思い込みから「近親憎悪感」を強めるだけの結果になりかねない。日本における「反中」や「嫌韓」の流れには、すでにその兆候が出ているように思う。

[参考文献]（アルファベット順）

ベネディクト・アンダーソン、1987、『想像の共同体』、リブロポート。

朝日新聞取材班、2007、『「過去の克服」と愛国心』、朝日新聞社。

張竜傑、2007、「日本のポピュラー・カルチャーの開放を通して見た韓国のメディアの変容」、福岡市での日中韓シンポジウム「新しい連携と地域アイデンティティ形成に向けて」分科会「ポップカルチャーと基底文化」（２月２日）での発表。

鄭求宗、2007、「ソフトパワー時代の日韓関係 ――『文化の世紀』をリードする『韓流』と『日流』の出会い」、第43回韓日・日韓協力委員会合同総会で発表の「グローバル時代の日韓文化交流」の補完ペーパー（未出版）。

David, Randolf S., 2002, *Nation, Self and Citizenship: An Invitation to Philippine Sociology*, Quezon City: University of the Philippines.

Erikson, Eric H., 1968, *Identity: Youth and Crisis*. New York: W.W. Norton & Company.

European Commission Press and Communication Service, 2000, *How Europeans see themselves: Looking thorough the mirror with public opinion surveys*, (http://europa.eu.int/comm/publications/booklets/eu_documentation/05/txt_en.pdf)

洪潤植、2007、「日中韓の共通基底文化とその現代的意義」、福岡市での日中韓シンポジウム基調講演（２月２日）。

石塚雅彦、2003、「ポップカルチャーはアジア統合のエンジンになるか」、『中央公論』（2003年３月号）

岩渕功一、2001、『トランスナショナル・ジャパン ── アジアをつなぐポピュラー文化』、岩波書店。
金秀炫、2007、「韓流ブームの意義とあるべき方向性」、福岡市での日中韓シンポジウム分科会「ポップカルチャーと基底文化」（２月２日）での発表。
毛利嘉孝、2004、「『冬のソナタ』と能動的ファンの文化実践」、毛利編『日式韓流 ──「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』、せりか書房：14–50。
大野俊、2003、「ひとのグローバリゼーションが進むアジア太平洋の中の日本」、中尾茂夫監修『日本経済再生の条件』、筑摩書房。
朴裕河、2005、『反日ナショナリズムを超えて ── 韓国人の反日感情を読み解く』、河出書房親書。
李相哲、2007、「東アジア文化、新たな可能性」、福岡市での日中韓シンポジウム分科会「ポップカルチャーと基底文化」（２月２日）での発表。
劉文兵、2006、『中国10億人の日本映画熱狂史』、集英社新書。
太和田基、2007、「エンタテイメントの世界から見た『日中韓』」、福岡市での日中韓シンポジウム分科会「ポップカルチャーと基底文化」（２月２日）での発表。